

## ■ 書 評



### クロストークから読み解く 周産期メンタルヘルス

岡野禎治, 鈴木利人, 杉山 隆,  
新井陽子 編  
南山堂  
2016年8月 206頁  
本体価格 3,500+税

本書は、周産期の精神的な課題に対する、産科医や精神科医、助産師や保健師などの医療・保健関係の多職種連携による支援の様子を、現場での臨場感あふれる連携の醍醐味が伝わることを目的に対話形式（クロストーク）で示したものである。編者や執筆者は、日本周産期メンタルヘルス学会の役員が中心で、同学会の推薦図書に指定されている。

本書は、第1章 周産期メンタルヘルス概論、第2章 事例で読み解く周産期メンタルヘルス〈妊娠期編〉、第3章 事例で読み解く周産期メンタルヘルス〈産後編〉の3章構成である。第1章の概論では、産科・精神科・助産の各領域に加え、妊娠期からのスクリーニングと早期介入について概説されている。第2章の妊娠期の架空事例は、統合失調症・うつ病・パニック障害・強迫性障害・摂食障害・パーソナリティ障害といった精神障害に加え、妊産婦への暴力が扱われている。第3章の産後の架空事例は、産褥精神病・産後の気分障害（うつ病および双極性障害）・ボンディング障害、死産経験後の悲哀が扱われている。第2・3章の対話形式の事例では、欄外の随所にKey Word、PointあるいはMEMOとして、各専門領域の基本的な用語や考え方について解説されている。

周産期メンタルヘルスの重要性は、古くから認識されてきた。最近でも、母親をはじめとする養育者のメンタルヘルスは、子どものこころの成長や発達に大きく、かつ長期にわたって影響を与えるという研究報告も多い。周産期メンタルヘルス・ケアの充実が、養育者や子どものみならず、社会全体にとって有用であることはいうまでもない。

しかし、周産期メンタルヘルスは、医療機関を中心

とする院内リエゾン活動から地域における保健福祉領域のアウトリーチ活動まで広範囲な領域を含み、多大なマンパワーを要するものと通常認識されていると考えられる。本書の架空事例の中には、総合病院に勤務経験のある精神科医であれば、誰でも経験したことのある、一般的な事例も含まれる。しかし、最近では周産期医療の進展に伴い、高齢出産・不妊治療・多胎治療・出生前診断など新たな課題が増加し、多岐にわたるメンタル・サポートが期待され、多職種連携による個別的な対応を余儀なくされ、対応に苦慮する事例も少なくないであろう。周産期メンタルヘルスは、分娩前後の女性のみならず乳幼児、配偶者という家族全体のメンタルヘルスを包括的に対応する必要がある、幅広い領域にまたがるため、専門以外の基本的な知識や情報が不可欠であるが、最新の知識や情報を個人で網羅することは不可能で、他の専門領域との連携が不可欠である。産婦人科医・助産師・看護師・小児科医・保健師・精神科医・精神保健福祉士・ソーシャルワーカー・臨床心理士・薬剤師・保育士・児童相談所の職員など、医療だけでなく保健・福祉の多種職が、無理なく円滑に連携しながら支援するシステムの構築が求められる。このような連携のとれる支援者を育成し、全戸訪問などで掘り起こした周産期メンタルヘルス・ケアのニーズに適切に対応できるようにすることは喫緊の課題である。

本書は、クロストーク（対話）を通じて多職種間連携を具体的にイメージしやすくしている点が特徴である。クロストークは多職種による1対1のほか、複数名のクロストークが連続する場合もあり、クロストークの方法も対面式以外に電話やミニカンファレンスなど様々な場面でダイナミックに展開される。欄外のKey WordやPointなどは、専門外の読者の理解を深めるだけでなく、専門家にとっては、専門外の支援者に対する説明の際の手本として参考になるであろう。各事例からは、精神科医だけでなくすべての支援者に必要とされる支持的受容的なかわりも読み取れる。本書は、周産期にかかわる可能性のあるすべての精神科医にとって、一度は手に取って目を通すに値する本であるといえる。

(高橋秀俊)